

2011 道東トレセンマッチ(帯広)U-13 報告書

1. 期日 平成23年10月29日(土)、30日(日)
2. 会場 帯広市十勝川河川敷サッカー場
3. スタッフ 飯塚順也(大楽毛)、沼田 懇(鳥取)、八城雅彦(北)

4. 参加選手(14名)

	選手氏名	所属チーム		選手氏名	所属チーム
1	菅原 直弥	SC釧路	8	小林 秀太	SC釧路
2	松永 昌之	SC釧路	9	高橋 恵佑	鳥取
3	貢 大輝	SC釧路	10	加藤 駿	鳥取
4	坂地 祐輔	SC釧路	11	菊地 裕斗	鳥取
5	戸井 凱音	SC釧路	12	石岡 和樹	鳥取
6	長山 聖翔	SC釧路	13	菊池 勇人	遠矢
7	浅井 勇真	SC釧路	14	小林 青葉	桜が丘

2. はじめに

今年度の道東トレセンマッチ参加回数が、0~1回の選手でチームを構成した。

夏季トレセンでは、「ポゼッション」「ビルドアップ」「守備」を中心としたトレーニングを重ねてきた。まとめとなる今遠征では、これらのトレーニングの成果をどの程度表現できるかを追求しながらプレーすることを選手に伝え、ゲームに臨んだ。チーム戦術に関係なく、サッカー選手として必要となるベーシックな要素を実戦を通して意識づけることを意図し、釧路の選手の底上げを狙った。

3. 成果と課題

《 攻撃 》

以下の2点を確認してゲームに臨んだ。

- ①ボールを受ける前に必ずまわりを観ること
- ②状況に応じて素早くポジションをとりパスコースを作ること

①については、数人の選手はボールを受ける直前にまわりを観ようとしているシーンが確認できたが、多くの選手はほとんど観ていないか、ボンヤリとしか観ていない状態であった。しかし、前者においてもゲームが進むにつれて意識が薄れていく様子が窺えた。「観ること」そのものが目的ではないが、例えばパスであったりシュートであったりポジショニングであったりと、次のプレーへの適切な判断を下すための情報収集の手段として、ボールを受ける前に「しっかり観る」ことは必要不可欠な準備である。日頃から徹底して意識付け、習慣化させる取り組みが必要である。

②については、トレーニングの成果が表れてフィニッシュまでつながったシーンが幾度かあった。その大半は、DFラインがボールを持った時に、ボランチがタイミング良く関わって前向きにボールを収め、サイドハーフがアクションを起こしてボールを引き出しゴールに迫るという展開であった。しかし、FWにくさびを入れた後のシーンでは効果的な関わりは少なかった。サポート位置が悪く、せっかく前に運んだボールをうまく動かさずに下げてしまったり持ちすぎて突破のタイミングを逸するという状況である。

味方しか観ていないがために、相手がプレッシャーをかけてきているのにパスを出してボールを失うというシーンも多くあった。また、サイドの選手の広がり遅かったりFWの裏への意識が乏しかったりして、チーム全体の幅と深さを確保できていないことも多かった。

多くの選手はむやみに蹴ることなく、ボールを失わずに運ぼうとする意識をもってプレーしていた。しかし、まわりを観る(観ておく)ことが少ないがために、状況に応じたポジショニングができなかったり効果的なコントロールができなかったりする選手が多かった。また、全てのプレーの根幹となるパス&コントロールの質の向上が不可欠である。タイミングや強弱、キックの種類も含めて、徹底したトレーニングが必要である。

《 守 備 》

以下の2点を確認してゲームに臨んだ。

- ①ボールの移動中に正しいポジションを取ること
- ②ボールを積極的に奪いに行くこと

①については具体的に、自分のマークする相手とボールを同一視し、パスの質によってはインターセプトを狙えるポジションを取る。相手に変化してもそれに対応してポジションを取り続ける、ということを確認した。これについては、選手によって意識に大きな差があった。どの選手もインターセプトを狙う必要性を理解してはいる。しかし、そのための正しいポジションを瞬時に見極めて準備しようとする選手は数人で、ボールウォッチャーになってしまってポジションがとれない選手が多かった。コーチングするといくらか意識は高まるが、時間経過とともにその意識も薄れていった。また、ポジション修正の意識が高い選手も、試合終盤になると意識が薄れていた。日頃から徹底して意識付け、習慣化させる取り組みが必要である。

②については、正しいポジションを取った上で、ボール保持者の状況から次のパスコースを予測し、積極的にインターセプトを狙うということを伝えた。上記で述べたように、正しいポジションをとれていない選手が多かったため、なかなか意図したシーンは見られなかった。しかし、意識の高い選手やポジションに関するコーチングをした直後は、攻撃につながるインターセプトを成功させる状況が何度か生まれた。

選手によっては「積極的に奪いに行く」という意味を“どんな状況でもボールにチャレンジする”というような意味にとらえている様子を感じられた。1対1の場面で、相手の状況を考えずにやみくもにボールを奪いに行こうとして簡単に抜かれたり、アプローチのタイミングが完全に遅れているにもかかわらず飛び込んでしまったりするシーンが多々見られた。正しいポジションから、状況を観て判断

4. まとめ

今遠征の参加選手は皆素直で、各々が上達を目指してサッカーを学ぼうとする姿勢はとても良かった。遠征経験が少なく、移動中のマナーや望ましい行動の仕方を知らずに課題がある選手もいたが、これからも向上心と向学心を持ってサッカーに関わる姿勢持ってもらいたい。

また、攻撃面を中心に、トレーニングしてきたことやゲーム前に確認したことを実践しようとする姿勢もよく感じられた。しかし、選手によってその意識に差があったことも確かである。この差は普段のトレーニング環境の差、すなわち所属チームのトレーニングで積み上げられているか否かの差であるとも考えられる。チームの戦術うんぬんではなく、サッカー選手として絶対必要不可欠なベーシックな要素を、毎日のトレーニングで磨いていくことが成長のための一番の近道であると強く感じる。